

Happy

Ever

After



「ちょっと、スレイン？」

夕食の洗い物を終えて戻ると、リビングのソファでスレインが仰向けになって眠っていた。

「前、開けすぎじゃない？ 見えてるよ」

彼のシャツのボタンはいつもガードが甘めだが、今日は四つも外れている。はだけた部分に胸がちらっと覗いているし、腹筋のへこみに汗が浮いているのも見える。

「しょうがないなあ」

座面の空いたスペースに腰を下ろし、よれたシャツの襟を寄せた。ペンダントのトップが首の後ろに回り込んだので前に戻す。ついでに髪も整える。そのままボタンを留めようとすると、ひし、と手首を握られた。

「あ、起きてたの」

「……………伊奈帆。お前な」

超低音。しかもめちゃくちゃ目つきが悪い。どうしたんだろう。寝起きにしても機嫌が悪すぎるんだけど。

「ボタンを外すならわかる。なぜ留める？」

「へ？」

沈黙。のち、伊奈帆は我に返る。久しぶりに見る殺伐とした表情と視線について見惚れてしまった。笑顔が一番いいけれど、こういう顔も懐かしく面白い。

いや。それは置いといて考えろ。

なぜ留める、って言ったな。

あと、外すならわかる……………って。

あ、外してほしいってこと？

「もしかして、誘ってた？」

「……………」

眉間に深い皺が寄る。当たりっぽい。

伊奈帆はシャツから慌てて手を離し、ハンズアップで降参のポーズを取る。

「そうとは知らずもったいな……………、あ、いや、ごめん。風邪引くといけないと思って」

「もういい」

口をへの字に曲げて、胡坐をかいてそっぽを向いた。声は重低音のまま。むちゃくちゃ怒ってる。

「わ、待って待って。やり直し。リテイク。もう一回。ね、今度はちゃんとするから」

「ふん」

伊奈帆は両手を胸の前でぱちんと合わせる。

「お願いします。この通り」

「……ぶっ、あははっ」

意外な声を怪訝に思っ顔を上上げる。スレインは口を開けて笑っていた。

「スレイン？」

彼は膝をぼん、と叩き笑いを収める。

「わかったわかった。別に怒ってない」

「ほんと？」

スレインは呆れ半分の笑顔で肩を竦めた。この表情は反則だろうと伊奈帆は思う。

「からかっただけ。もう一回って、どこから？」

存外に乗り気。僕に甘いな、スレインは。

「寝たふりしてるところから」

おっけー、と軽い返事が返る。

「ボタンは？」

「戻して」

プチプチとスレインが自分でシャツのボタンを外す。無防備な表情がぐつとくる。さっき失敗しててよかったかも。

「これでいいか？」

スレインが元の体勢に戻る。……うん。すごい

い。据え膳のこの状況で能天気ボタンを留めたりしたら普通怒る。さっきは僕が悪かったな。

「オーケイ。じゃあ、僕はそっちから出てくるね」

伊奈帆が寝室を指すと、スレインは頷き苦笑した。

「なんか、変なことになったなあ」

「気にしないで」

「お前は少しは気にしろよ」

「反省してる。じゃあ、もう一回」

伊奈帆は寝室の扉を閉める。

「スレイン？」

駄目だ、吹き出す。伊奈帆の声に笑いそうになる

が我慢する。

「風邪引くよ。起きて」

優しい言い方だ。ちよつといいな。こういう声は

嫌いじゃない。

「……」

でも、多分まだ起きちゃ駄目だろう。寝たふりを続ける。伊奈帆の手が肩に触れた。首の後ろを腕が通る。結構大胆だ。お、次は膝裏か。もっと順番とか……。

「よっ、と」

「えっ？」

浮遊感。頭がぐんと後ろに反れて目を開ける。

「おいおい待って待って、なんだこれ？」

抱かれている。あ、変な意味じゃなくて、そのままの意味で。ジャパニーズ・スラングで言うお姫様抱っこというやつで。

「いや、続いているから目を閉じて。寝たふりしてて」

「はあ!？」

「ほら、寝息立てて」

「ええと……、……ぐう？　ぐう、ぐう」

よくわからないが、これでいいのか？　移動している。ベッドに行くのだろうか。情緒が無いのはいつものことだが、こいつにしては強引だな。

「ぐー、ぐー」

「もつと色っぽいのがいいなあ、寝息」

「わがまま言うな!……んーと、すう、すう」

「悪くないけど、もう一声」

「お前な……!!　うーん、えつと……。あ!　くう、くう」

「うん、かわいい」

「……じゃなくて、おい!」

ほす、と身体の下にベッドのスプリングの感触。両腕が肩と膝裏から離れる。

……。

……。

……？

……触らないのか？

「……いつまでやるんだ？　これ」

目を閉じたまま不安になって問いかける。そこにいるよな？

「うん。起きてもいいよ」

声は右側。良かった。ちゃんといた。

「ん……、え？」

瞼を開くと天井が見えた。照明はオレンジの暖色。声のした、右の方へ顔を向ける。伊奈帆の顔は思ったよりも近くにあった。床に片膝をつき、真面目な顔でこちらを見ている。

「伊奈帆……?」

「しーっ。聞いて」

スレインは体を起こし、脚を下ろしてベッドに座る。裸足の指のすぐそこに、伊奈帆の膝と足がある。跪く姿勢で、胸に当てる手の指先が白い。気取られないよう息を呑む。こういう所作を僕は昔いろん

な相手にしたけれど、今のこいつにはかなわない、
と思った。

「……もしかしたら、こんなの嫌かもしれないんだ
けど」

そう言つて、握り込んだ手の中から現れたのは銀
に光る細い指輪だ。意味を悟り、顔を見る。見つめ
合う双眸が隻眼だと知っているのは、今の世界に何
人いるだろう。

「スレイン」
「……うん」

指先が服を握るその仕草。僕の昔の癖と同じ。だ
からよくわかる。怖いんだ。

「これ。僕が、君の指にはめていい？」

「……ああ、いいよ」

怖がる必要なんてない、と胸を握る手に触れる。
左手だった。

「ありがとう。……生きてくれて。今も、僕と一緒
にいてくれて」

その手の爪に唇が落ち、リングが薬指に通る。

「好きです。ずっと、これからも」

手の平の裏表を顔の前に翳してみる。きつくもな
いし、ずれたりしない。ぴったりだ。

「……前から準備してたのか？これ」

伊奈帆が、ぼすんとベッドの隣に座る。

「うん、結構前に。タイミングがなくて」

「タイミングねえ……」

あのかっこ悪いおねだりやししょうもない小芝居
が、プロポーズのきっかけと聞くと複雑だ。

「夜景とか遊園地とか言わないけど、もつと、ム
ドとかないか？」

「やっぱり？」

でもね、と伊奈帆は照れくさそうに頬を掻く。

「さっきの君の悪戯っぽい笑顔見てたら、なんか、
今しかないかって」

「へえ」

どれのことかな、と考えた自分に微笑む。どれか
分らないくらい、僕は笑ってるってことだ。こい
つがいると。

「スレイン、僕に甘いよね」

「朴念仁が、気づいてたんだ？」

当たり前でしょ、と伊奈帆は自分の髪をつまむ。

「髪を拭いてくれたし」

「何年前の話だ、それ」

「七年前」

そんなになるか。

スレインが伊奈帆を見ると、伊奈帆はこそばゆそうにふふっと笑った。その唇にキスをする。鼻が触れて、顎を彼の手が支える。耳の横に手を通すと癖毛が指の間で跳ねる。

「……っふ、……あ」

目を開けるのが同時。そのことにくすくす笑い合う。

「……ところで、さっきの続きは？」

スレインが囁くと、伊奈帆の手がシャツの首の後ろに触れ、襟に沿ってすうっと指を滑らせる。生地を挟んだボタンの裏表に親指と人差し指の爪先が掛かる。

「このボタン、外してもいい？」

「いちいち聞くな、そんなこと」

こういうところなんだよな、とスレインは破顔する。情緒が無くて、気が利かなくて、じれったくて。時々すぐく子どもっぽくて。

「……でも、お前らしいか」

理屈屋で計算高いのに、呆れるくらい純で優しい。「そういうところが、好きなんだ」

リングの指がボタンを外す手に重なる。

[Now and Forever]

Carnerian's Eye

ガラン、と優美な鐘の音がした。

「お客様」

横を向くと、スマートないでたちの女性が立っている。店員に違いない。スレインは慌てて会釈する。

「ああ、ごめんなさい。すぐ退きます」

表通りの宝飾店。ショーウィンドウのど真ん中で立ち止まってしまっていた。世界的な高級ブランドの路面店である。いくら歩道からとはいえ、量販店のカジュアルファッションに身を包んだ男が一人、ネギの飛び出た買い物袋を両手にぶら下げて突っ立っていれば営業妨害に違いない。そのことの注意かと思っただけだ。

「滅相もございません。どちらがお気に召しました？」

にこやかな笑顔でそう聞かれ、スレインはえ？と間抜けな声を出してしまう。

「美しい騎士に見初められた、栄誉ある宝石はどちらでしょう？」

なんだろう、その変な言い方……。ネギが剣つてこと？と思いつつ、スレインは磨き込まれたウィンドウガラスを汚さないようにそれを目で示す。

「えっと、これです。石の色が、とても綺麗だったので」

オーバルカボッションのカジュアルリング。カジュアルと言う割に、価格は全く親しみやすくはないんだろうけれど。

「よろしければ、お近くでご覧になりませんか？」

思わぬ言葉に、スレインはギョツとしつつ両手を胸の前で振る。肘にずり下がる買い物袋がずっしり重い。

「いえ、そんな。ここで充分です。お恥ずかしいのですが、お金もありませんし」

ほら、と二つの袋を上下に動かし苦笑する。店員はくすりと笑みを漏らした後に、エントランスへ手を翻す。

「冷たいものをご用意いたします。店内へどうぞ」

スレインのこめかみに汗が伝う。まずは展開なんじゃないか。流されやすいのを自覚している。押し売りされたらたまらない。

「いえ、僕、普段着で……。こんな服では、お店の

「ご迷惑でしょう」

「買い物袋の中には卵もあるし牛乳もある。あまり寄り道しては……。」

「本日は、ご予約のお客様もいらっしやいませんか」

「でも……」

日本語のたじたじ、という副詞はこういう時に使うのか、と他人事のように思考が俯瞰する。

「どうぞ。冷蔵庫のスペースとコーヒーはサービスです」

「そのまま言われて断れるほど、面の皮は厚くない。」

「……じゃあ、少しだけ」

「……ということがあって」

「君、すごいね」

「別に……。押しが強く断れなかっただけ」

その日の夕食後。スレインはダイニングテーブルで向かいに座る伊奈帆相手に事の顛末を話していた。

「二時間話して、服を着せられてなぜかお土産までもらった」

これだ、と指さすのは二人の間に置かれた煉瓦色のシックな箱。スーパードパートにも売っていない海外のチョコレートである。

「顔がiggioってお得だね」

ぱくり、とチョコをつまんだ伊奈帆が感心した声を出す。感心しているのは声音だけで、その実は面白がっているに違いない。

「そうかな」

ジーンズではないにせよ、ノージャケットの麻シャツ、チノパン姿である。靴は合皮でぎりぎり皮だが、あんな服でなぜ入店できたかは、その後一時間以上着せ替え人形と化したことで理解した。写真は流石に断ったけれど、そもその原因は、伊奈帆の言葉を使うなら、「顔がiggio」ってことになるかもしれない。

しかし疲れた。

「苦労も多い、って？」

ブランドモデルがどうか言うのか言われた時には、どうやってこの窮地を脱出したものかほとほと困り果ててしまった。スレインは深く息を吐く。

「……そうだな」

緑茶を引き寄せずずっと飲むと、伊奈帆が変な顔

をしていた。

「なんだ？」

「スレイン。今の、全宇宙の大半を占めるモテない男が聞いたら炎上するよ」

「今のって？」

「苦勞も多い？ そうだな、のくだり」

言いがかりに近いのでは、と思わなくもないが、理解はできる。世の中には、モテたい男とモテない男とモテたくはない男がいる。なるほどな、とスレインは悪い感じに口角を上げる。

「へえ。お前も炎上するか？」

「僕はモテてるから」

伊奈帆はしれっと即答した。からかってやるつもりだったのに、と拍子抜ける。

「は？ 誰に？」

「君に」

机の下を蹴つ飛ばすが、スカッと空振り身体が傾く。見えてないのに避けられた。読まれてるな。全く、面白くない。

「それで、どんなのだったの？」

「何が？」

「君が気に入ったやつだよ」

「あ——……」

湯呑みを手の中で無意味に転がす。こいつに言うのは恥ずかしいけれど、隠したって仕方がないか。

「……指輪」

「へえ」

伊奈帆がちらりと僕の手を見る。陶器と擦れてかちんと小さく音がした。

「赤いやつ。カーネリアンって言ってたな」

「ふうん」

「ずず、とお茶をすする男の顔を眺める。」

「……よく似てたから」

「気づいたら、声に出してしまった。」

「何に？」

「当然、聞き返すよなあ。」

テーブルに膝を乗せ、手をつき向こうに身体を伸ばす。頬に触れ、脛の縁を親指でなぞる。

「……ここに」

その毗と、ぽかんと開いた口にキス。チョコと緑茶が混ざってる。独特だけれど、嫌いな味じゃない。

「わかったか？」

「ぱちくりと目を瞬いて、伊奈帆は口元を左手で覆

う。

「……かっこいいな、映画みたい。顔がいいって
得だね」

ははっ、とスレインは笑う。

「お前もそんなに悪くない」

「でしょ。わかる？」

げし、と蹴ると今度は当たった。伊奈帆がくすくす笑いだす。蹴られて喜ぶ趣味だったか？

「急に笑い出して、なんだ？」

「いや、前にね。僕も同じようなことがあったな
て」

「お前がマネキン？ あんなの向いていないと思う
けど、案外……？」

「違う違う、その前のところ。買わない指輪の前で
僕もね」

あれ、と思って立ち止まったら掴まっちゃって。

「いつ？」

「それ、買いに行った時」

伊奈帆の右手の人差し指がスレインの指をつつ
いた。宝石は一つもついていない、同じ形の左手の
リング。

どんな顔して買ったのか、と想像する。こいつの

ことだから、いつものポーカーフェイスで、サイズ
やデザインを秒で決めてきたんだろうな。

そんな奴が見惚れた石か。なぜだか少し悔しい。

「お前が見たの、どんな石だった？」

「君の瞳と同じ色だよ。今度見に行く？」

「気が向いたらな」

テーブルの上で指が結ぶ。細い銀の光の反射がく
すぐつたい。

Sea Blue Chaicedony

目を奪われた。

細いゴールドの台座に配置されたパールグリーン。雪の欠片のように小さい。淡色の宝石の持つ引力に伊奈帆は佇む。

「ケースからお出しいたしましょうか？」

女性店員の声に、伊奈帆は我に返る。店内のBGMが聞こえ出した。楽器の音だけで構成された音楽は、絶妙な照明の色と相まって格式高い雰囲気醸し出している。

百貨店宝飾売り場の陳列スペース。思いがけずそこに引き寄せられたのは、配置された商品の一つがとてもしていたからだ。

「あ、目的は別にあつて。見させてもらつてるだけです」

先程の店員がカウンターの内側から微笑む。

「ぜひ、ご覧になってください」

押しが強い。物腰穏やかだが、百貨店勤務ベテランの商売魂を感じる。伊奈帆はガラスに触れないよ

うに指で示す。

「じゃあ……。その、青緑の」

「こちらでございますね」

白い手袋の両手が売り物の一つを丁寧に取り出し、布張りの小さなトレイに乗せてガラスの上にもなく置く。ケースから出すと、その石の輝きが増したように思える。

「綺麗ですね。エメラルド？」

鉱物はともかく、宝石には詳しくない。

「カルセドニーです」

玉髓か。化学式は SiO_2 。硬度は7。不純物で色が違うんだっただけかな。

「どういう石なんですか？」

科学的ではなく、詩的な説明を求めて伊奈帆は問いかける。店員は待つてましたとばかりに頷き、身体の前で両手を重ねる。

「赤色はカーネリアン。縞模様のはアゲート……日本では瑪瑙と呼ばれることもありますね。オレンジ、ブルー、ピンクなど、カルセドニーには様々なお色がございます」

クリソプレーズ。ジャスパー。ブラッドストーン。淀みなく話す声は快活だ。彼女は石が、この仕事が

本当に好きなのだろう。

「石言葉は、社交性や思いやり。自信、冒険心など」
でも、と店員は揃えた指でガラスの上の宝石を示す。

「こちらは、少し特別です」

意味深な眼差しに興味を引かれる。

「どういうことですか？」

店員の指がリングを三本の指でつまみ、目の高さへと持ち上げる。

「こちらの『シーブルーカルセドニー』は、二〇〇二年から流通しております」

僕は当時二歳。宝石の歴史としては浅いのがわかる。

「ドイツの宝石業者の特殊な技術で、カルセドニーに処理を施しているものです。石言葉は、『博愛』」

石が光を透過する。色が水面のように揺らめく。

「エーゲ海のように透き通るブルーグリーンは、宝石職人の夢でした」

咄嗟に連想したのは青い薔薇だ。奇跡の花が誕生したのは二〇〇九年。自然界に存在しないブルーを願う職人の手は、宝石へ。花へ。美しいものへ向かうのだ。その果てしなさに、どこかで知った言葉が

浮かぶ。

——へヴンリーブルー。

「わかる気がします。すごく綺麗だから」

店員はにっこり笑った。伊奈帆はこくりと微笑み返す。

「お手に取られますか？」

「あ、いえ」

彼の瞳の色に似ていたから見てただけで、と言いつうになり口を嚙む。あの双眸を宝石に例えてしまった自分が照れくさい。

「見るだけにしておきます。今日はその、……あの。指輪をお願いしようと思って来たんです」

言った後で、今指輪を見せてもらっていたつげと気付く。柄にもなくおろおろしている。頭も口も回らない。

「指輪？……あつ」

店員がきよとんとした後、手を叩く勢いで納得し大きく頷く。

「ブライダルリングでございますか？」

「えっと。……そう、です」

あんなに言葉足らずで察してくれるとは流石だ。それにしても耳が熱い。

「エンゲージリングをお求めですか？」

そういうのも、やっばりいるのかなあ、と想像するが首を振る。約束や取り決め、そういう未来のレールは僕らにはいらぬ気がして。

「いえ。結婚指輪を」

僕は、誓いの言葉を君に伝える勇気が欲しいだけなんだ。



9th Anniversary

ボタン、と引き出しを仕舞いスレインは額の汗を拭う。ずっと正座していたせいで膝が痛い。

とりあえず、こんなもんかな。

「そっち終わった？」

伊奈帆がひよこつと顔を出した。スレインは彼に向かつて頷く。

「ああ。今終わった」

「あ、綺麗」

伊奈帆は寝室を見渡しながら歩み寄る。彼が隣にしゃがんだので、スレインはクローゼットを指で示す。

「とりあえず秋冬のものは奥のコンテナに入ってる。ここが仕事着で、ここが私服、ベルトとかの小物はこっちで、ネクタイはあれだ。下着や寝巻きはベッドの下の引き出し。すぐ使うシャツとスーツはそっち」

指の動きを伊奈帆の視線が追いかけて、最後は室内用のコンパクトなアルミの物干しで止まった。吊るしてあるのは春夏の仕事着とシャツが計八枚。

「皺がついてたのは、霧吹きでシュッてしといた」

伊奈帆が小さく口笛を吹く。感情表現が一筋縄ではいかないやつだが、こういう所は普通の男みたいだな、という感想をスレインは抱く。

「全部やってくれたの？」

「駄目だったか？」

「いや。手際いいね。六箱分でしょ。大変だったんじゃない？」

「こういうのは、慣れてるから」

「そうだっけ」

伊奈帆がよつ、と掛け声とともに勢いよく立ち上がり、床に積んだダンボールを拾う。

「ダンボールまとめるから」

「うん」

スレインはビニール紐を取りに行く。リビングのテーブルに、ハサミとセットで置いてあった。わかりやすい。

「あと、何するんだ？」

ダンボールを一絡げにしてリビングの隅に立て掛ける。寝室は片付いたし、リビングも整理されている。伊奈帆のことだから、水回りもすぐ使えるようになったってのははずだ。

「えっとね……」

さらさらとメモを取る手を眺める。生活必需品で足りないものの確認しているのだろう。最低限のものはあるはずだが、食料や消耗品のストックはこれからだ。

「うん。とりあえず、これで住めるようになったかな」

前の住居からの引越し初日。引越し前の荷造りでこんなにあるのか、と驚いた荷物は、いざ新居に収まると物足りなさを感じる。必要なものは全て運んできたはずなのに、何かを忘れてきたような、そわそわとした心地になる。

「色々足りないものもあるし、買い物も行きたいけど」

伊奈帆が顎に手を当て天井に顔を向けた。真新しい照明器具が外光の照り返しでピカピカしている。「それは明日でいいかな。夕飯には早いけど、なんか食べに行こうよ」

「わかった」

伊奈帆にしては珍しい提案だが不満はない。朝から働き通しで疲れが出ているし、冷蔵庫の食材はゼロ。外食は理にかなっている。

伊奈帆がタブレット端末を手に取った。横から覗

き込むと地図が表示されている。ノーマルモードで表示される店舗や施設の目新しさに、違う場所だと改めて実感する。

「スレイン、何食べたい？」

「うーん……」

昔から、この質問の答えを探すのは難しい。食べられればそれでいい、贅沢を言うなら出来立てがいいかな、くらいだ。伊奈帆もそれを知っているから、僕の返答を待たず質問を重ねる。

「じゃあ、飲みたいものは？」

「あ、それならビールがいい」

暑いし、喉が渴いたし。

「いいね。僕は和食が希望。居酒屋探そうか。お座敷あるかな」

伊奈帆はタブレットに「和食」「居酒屋」と入力し、検索を始める。飲み物と食べ物のマリアージュ。いつものやりとり。いつもの通り。

「近くにあるか？」

越して来たばかりで、土地勘もない。地図の表示に不安が募る。一言で表すなら田舎だ。

「歩いて行ける所になれば、スーパード行こう。近くにあったよね」

「ああ。あそこか」

平地の中に突如現れ、どでんと存在感を放つていた大型スーパ―が歩いてすぐのところにあつた。

「6 kmは、ちよつと遠いね」

「別にいいけど」

「帰りが面倒じゃない？」

「酔いは覚めるかもな」

「バスはないし。タクシー呼ぶまでもないなあ」

伊奈帆が呟き、タブレットの電源を切る。

「うん。スーパ―行こっか」

伊奈帆の切り替えにスレインは笑う。

「ああ」

伊奈帆が財布と折りたたみ式のエコバッグを二つ持ち、スレインはプラスチックの買い物かごを手渡される。生活必需品の買い出しもついでに済ます気なのだろう。特売の戦力と荷物持ちを兼ね、連れ立っての買い出し。まあこれも、いつものことだ。

「なんか、いつも通りだな」

スーパ―で食材を買って自炊。特売品がメイン
デイツュ。

「いつも通りだね」

「いいんじゃない？と伊奈帆が窓の方を見る。

「どこにいても、僕は僕だよ」

「ま、そうだな」

「君もね」

「え？」

伊奈帆の右目と目が合った。につ、と笑つて前歯が見える。

「どこにいても、君は君だよ」

不意打ちの笑顔と一言に、言葉を失い耳がぼうつと熱くなる。

「……今の台詞、恥ずかしいな」

「あ、わかった？ きめてみたんだけど」

その一言に気が抜ける。ちよつとかつこよかつたの。お前、そういうところだぞ。

「もつとムードとか……」

「わかった。また言うよ、後で。とりあえず先にスーパ―行こう」

僕らは玄関へ向かう。

「後でって？」

「君が酔い潰れて、可愛くなつた頃合いに」
げし、と足が出るがぴよんと飛んで避けられた。

腹立つなあ。

「お前、いつも呑み負けるくせに」

「痛いところだね」

上り框で我先にともつれ合いつつ靴を履く。

「おつとめシールには、まだ早いかな」

「待つか？」

「いや。今日は美味しいもの全部買おう」

「たとえば？」

「大トロとか」

「シヨウガツでもないのにあるか？ そんなの」

「中トロでもいい」

軽口を言い合いながら扉を開くと、空の色は瞳と同じ色の夕焼けだ。

[Happy Ever After]

あとがき

ZERO の方舟 15 開催おめでとうございます！

こちらの無配本は、アルドノア・ゼロ放送開始から9周年のお祝いにPixivに投稿したプロポーズ話を再録しました。「醤油取って」の破壊力には及びませんが(公式が強い)、こんな風に穏やかな二人の日常を想像することが出来るのも、あの最終回があったからこそ。原作には未来の可能背という十分なギフトをいただきましたが、それはそれとして雨の断章と続編はずっと待っています。あとプラモ。最終決戦仕様のスレイブニールを組み立てさせてください。

イメージソング

AM11:00 HY

奥付

Happy Ever After

発行 Scramble/鳴海

発行日 2023.11.12/ZERO の方舟 15

Mail jjncg720@yahoo.co.jp

Twitter @narumiblue

PixivID 955950

本作は制作会社、関係者、及び関係団体とは一切関係ありません。
無断転載、ネットオークションへの出品などはお控えください。